

概要報告

実施期日	8月2日(火)
部会名	中学校 特別支援教育部会

テーマ 『新規担当職員を即戦力にする教室・教材・引継資料等の業務環境』 ～ユニバーサルデザインの視点を生かしたシステムづくり～

提案概要

○実践に向けての課題意識

特別支援学級においては、生徒個々の発達の段階や特性を把握することに始まり、次にその段階にふさわしい教材の開発・準備をして、ようやく指導のスタートラインに立つことができる。自身の経験から、新たに担当した教員がより早く適切な支援を開始できるような環境・システムづくりを目指した。また、その際に、ユニバーサルデザインの視点を「どのような生徒にも」だけでなく、「どのような(経験・技量の)職員でも」に拡大して、検証・考察のベースに活用した。

○実践の概要

- ①進級・新入学者に関する引継情報の市内共通フォーマットの作成
- ②系統性をもった教材・教具の整備
- ③見通しをもった予定・時間割の管理
- ④学校としての支援体制の整備

○成果と課題

- ・引継共通フォーマットの実用化によって、年度スタート時に個々の特性や到達状況をより具体的に把握できるようになった。
- ・教材・教具や予定表の整備によって、見通しをもった指導をしやすくなった。
- ・多くの教員が特別支援学級での授業にかかわりをもつようになり、教科について支援の有効度を高めるとともに、インクルーシブ教育実現へのステップとしても有効な方向性と考えた。
- ・通常の学級の中にいる支援を要する生徒に対して、個に応じた支援をいかに進めていくか、学校体制としての検討・実践が望まれる。

質疑概要

特になし

研究協議概要

○研究協議の柱

- ①新規担当職員の困り感と有効な方策…今回の実践の効果・妥当性の検証や、より良い方策の協議
- ②学校全体の支援体制…特別支援学級・全体の両方に役立つ体制を作る方策の協議
(5～6名の6グループに分かれて、研究協議の柱について協議、発表をおこなった。)

研究協議の柱①

○引継について

- ・資料のフォーマット化(共通化)は良い。
- ・文書だけでなく、聞き取りも必要。保護者の様子や生徒の特性、細かい学習面での様子の情報がほしい。
- ・日常生活の様子は本人とかかわらないと分からないことも多い。
- ・生徒を直接見るのが良いので、体験入級などを実施すると良い。半日から1日見られるとつかめる。
- ・その子の特性などは話し合いなどをこまめにもち、共有化していく。個人ファイルを活用する。

- ・個別の教育計画をもっと詳しく作成する。
- ・経験のある先生がアドバイスしていく。
- ・職員の総入れ替わりは生徒・保護者にとっても困る。不信感にもつながる。

○教材・教具の整備について

- ・系統的に整備できている学校は現状では少ない。
- ・必要な教材が整っていると新しく担当したときに困り感が少ない。
- ・教材の整理・ファイリングは個別に合わせて活用しやすいように工夫する。
- ・マニュアルがないので、最初は手探りで授業であった。
- ・教科と生活に必要な能力をリンクさせる。
- ・個々の学習進度を担当間で共有して話し合いながら目指す方向を考える。
- ・簡単なことをやさしく教えれば伸びていくということではないことに気付いた。定着させるために繰り返すことも大事。
- ・3学年一緒、能力差のある生徒、様々な特性の生徒と合同で授業を行うことに困り感を感じている。
⇒グループわけの工夫、授業の構造化。
- ・ドリルやネットの資料などその場しのぎの感がある。
- ・一覧は目安にはなるが、一人ひとり目指すものが違うので、生徒の実情に合わせて工夫が必要。

研究協議の柱②

○学校全体の支援体制について

- ・教員全員がインクルーシブの視点をもつことが必要。
- ・特別支援学級からの発信が必要。
- ・特別支援学級担当と通常の学級担当との交流が不足している。
- ・通常の学級担当の教科交流は教科の専門性が生かせる。
- ・教科交流は音楽、美術が多い。できれば理科もお願いしたい。
- ・教科担当の先生との話し合いが必要。言葉かけなどアドバイスすることもある。
- ・生徒の教科交流は社会のルールを教えるために役に立つ。（教科交流の意義のひとつ）
- ・教科交流は大事であるが、教科担任にまる投げするのではなく、生徒の実情にあわせてコーディネートするコーディネーターが必要。
- ・部活動・昼食・行事などの交流でかかわりが深まっていく。
- ・行事の交流は、ルールや道具、参加形態などの配慮を話し合うなど通常^の学級の教員・生徒にも教育的意義は大きい。
- ・交流も生徒の実情に合わせて行っていく。生徒の居場所の確保、各クラスの受け入れ態勢、担任同士の情報共有など課題は多い。

まとめ概要

特別支援学級の置かれている状況は、地域、学校によって違っている。今回の提案にあるように、特別支援学級を受け持つ担任がすべて入れ替わってしまうということもある。特別支援教育の経験の浅い教員や若い教員も増えている。そして、通常の学級と特別支援学級との生徒・教員の交流も多様化してきている。個々の生徒の状況に応じたより細かい引継ぎ情報や、教材・教具の整備、環境の整備、カリキュラムの共有化は、生徒にとっても保護者にとってもとても大切なことである。交流については、生徒の状況に合わせて、保護者の考えを踏まえて、その目的・意義を考えて行わなければならない。また、生徒の進路、知的レベル、障害特性も考えて合意形成していくべきである。学校全体で、インクルーシブの視点を持ち、今ある環境の中で我々にできることは何かを考えていかなければならない。